＜博士学位論文要旨＞

六朝文人の政治と文学

― 魏、斉、梁文壇人物の政治的焦燥感を中心に ―

横浜国立大学大学院　環境情報学府　博士後期課程　（2014 年 3 月修了）

独孤　嬋覚

Politics and literature of the poets in the Six Dynasties

: A study focused on the poets' political anxiety in the Wei, Qi, Liang Dynasties

DUGU CHANJUE

Graduate School of Environment and Information Sciences, Yokohama National University

要旨

本論文は文学・政治・歴史・思想学という諸領域が交錯する場を新たな視点にし、魏・斉・梁文壇から代表的人物である曹丕・江淹・王融・蕭子良の四人を選び出し、彼らとその周辺の文人達の政治的焦燥感を中心に六朝文学を再考察した。

第一章では、曹丕の生い立ち、家族関係、生死観、歴史観、皇権、文学との関わり方、等を分析し、彼の文学作品中に「憂」字の頻出の真因を探った。

第二章では、江淹の「人生当適性為楽 (人生は当に性に適ふを楽しみと為すべし)」という価値観、斉武帝の寒人政策、江淹が「永明体」詩人に諷刺された真因、の三つの視点から「江郎才尽」（江淹が、青年期、中年期に六朝時代を代表する優れた作品を数多く書き、高い文名を馳せたのに、晩年には優れた傑作を一つも書けなく、文才が枯渇したと嘲笑された）という問題の原因を深く追究した。

第三章では、竟陵王蕭子良の政治的野心、竟陵王蕭子良の人材政策、斉武帝の戸籍、財政政策、王融伝に見える「晩節大習騎馬」の政治的意味の四点から南斉王融の政治クーデターにおいて、中高級士族と斉武帝が代表する皇権政治との対峙という本質を突き止めた。

ABSTRUCT

In this research, I would like to present a new synthetic viewpoint combining Literature, Politics, History, and Philosophy to analyze political anxieties of Cao Pi, Jiang Yan, Wang Ru and Xiao Ziliang, who represent literary circles In the Wei, Qi, Liang Dynasties.

In Chapter 1, I explored the real cause of frequent appearance of a " 憂 " character in Cao Pi's literary works through the analysis of his childhood history, family relationships, view of life and death, historical perspectives, the way he dealt with imperial power and literature.

Jiang Yan, a representative poet of the Southern Dynasty of China, couldn't write even a single masterpiece in his later years, and he was ridiculed for running out his talent for writing. After his death, a saying, "Jiang-lang-cai-jin (Jiang Yan's talent has run out)" was born. In chapter 2, I investigated this problem deeply through the analysis of his values that 'people should enjoy their lives in accordance with their nature', Emperor Wu of Southern Qi Xiao Ze's human resource policies, the reason why he was ridiculed by Yongming poets.

In chapter 3, I explored the true reason of Wang Rong's political coup through analyzing Prince Jingling Xiao Ziliang's political ambition, his human resource policy, Emperor Wu's family register system, his tax policy, the political reason why Wang Rong practiced riding in his later years.

1. 研究背景

魏晋南北朝は様々な異質な政権（軍閥、貴族、民族など）が並立する動乱の時代である。特に南北朝時代、150 年あまりの間に、王朝は四つも五つもあった。王朝の更迭に伴う激しい動乱の中、異民族による拉致、亡国の経験は日常茶飯事となり、過去の価値観は一瞬にして崩れ去り、図太く生きることだけがすべてとなった。実は、極めて複雑な政局をもつ六朝では、生涯、二つ或いは三つの王朝にも仕える文人は決して少なくない。日々、殺戮を目のあたりにする乱世の文人達にとって、如何に政治の中心で最後まで生き抜くことが最大な課題であった。文学は今日のような随筆、小説といった言語による審美的な芸術創作という枠組みを超え、文人達の政治世界に生きるための保身術の一つになったのである。乱世の文人にとって、文学創作は命がけのものである。一方で科挙制度がまだ存在しない六朝時代においては、文学はまた昇進術の一つとなった。

寒族の文人達の出世は門閥貴族の庇護にすがらなければならない。彼らは貴族の屋敷、幕府に出入りし、相手の文学趣味に迎合しながら、詩文を作り、官職を手に入れるのである。一方、文学は支配者側にとって、時には後継争いの道具となり、時には政治クーデターのための人材集めの口実となる。

2. 研究目的と方法

政治との関係において、六朝時代の文学は歴史上何時の時代よりも密接であるといえよう。それ故、単純に文人達の作品を文学的な視点から分析を加えることだけでは、六朝時代文学の真の姿を捉えづらいと思う。従来の「文学」という枠組みにはめ込めない六朝時代の「文学」を研究することにあたって、新しいアプローチが必要である。

本論文は中国の六朝時代における文人の活動を文学・政治・歴史・思想学という諸領域を単独に考察するのではなく、それらが交錯する場であったという点を新たな視点として、魏・斉・梁文壇から代表的人物である曹丕・江淹・王融・蕭子良の四人を選び出し、彼らとその周辺の文人達の政治的焦燥感を中心に六朝文学を再考察した。

3. 研究結果の独自性

第一章は曹丕の政治的焦燥感に由来する悲哀を明らかにした。曹丕は魏の初代皇帝であるが、文学に長じていたため、父の曹操、弟の曹植とともに後世「三曹」と称えられる。今日に伝わる最古の七言詩の『燕歌行』をはじめとする多くの優れた詩は『文選』に収められている。また、彼は中国最初の文学理論、評論書である『典論』を著し、文学は時空を超える不朽なものだと主張し、文学を史上最高の位置に占めさせた。王粲、徐幹、陳琳、阮瑀、応瑒、劉楨、呉質など当時一流の文人を自分の文学サロンに招き、文学活動を盛んに行ったため、建安文学に多大な貢献をし、リーダーとしての役割を果たした。故に、彼は建安文壇の代表的な人物である。

しかし、このような大文学者の曹丕は歴代評論の中で弟の曹植を僻地に左遷し、曹植の腹心の丁儀・丁廙兄弟とその一族を処刑した冷酷非情な君主と見なされている。しかも、高い文学的業績を残したにも関わらず、彼の五言詩は鐘嶸の『詩品』の中で中品に抑えられ、「詩聖」と称賛されるほど文名高い弟の曹植に及ばなかった。筆者は後世のこのような曹丕への定評に疑問を感じ、彼の伝記的史料と、文学作品における「憂」字の頻出との関係を切り口にして、曹丕の生い立ち、家族関係、文士達との主従関係、生死観、歴史観、文学との関わり方を分析し、彼の政治的焦燥感に由来する彼の悲哀の真因を突き止め、曹丕像を再検討した。

第二章は江淹の才能が尽きたと揶揄された原因を突き止めた。門閥を極めて重視している六朝時代において、寒族出身の江淹は優れた文才と時局を的確に見定める政治的機敏さにより、南朝の宋、斉、梁の三朝に仕え、伯爵にまで昇り詰めた。その彼は「恨みの賦」、「別れの賦」等六朝時代を代表する優れた叙情賦を書き、前漢から南朝宋までの個性や文学的風格が異なる代表的な三十人の詩人の五言詩を模倣し、「雑体詩」三十首という連作詩を作り、連作の模擬詩という独特の文学観表現方法を創出した。政治と文学との優れた才能を兼ね備えた六朝時代文人の典型的人物である。しかし、青年期、中年期に高い文名を馳せた彼は晩年、優れた文学作品を一つも書けなくなったため、文才が尽きたと揶揄され、後世、詩人の文才が尽きることを意味する「江郎（江淹）才尽」という成語まで生まれた。

明、清時代及び現代の学者達は江淹が晩年に高い官位に上がりつめ、文学創作の質が悪くなったため、才能が尽きたと嘲笑されたと主張しているが、筆者は江淹の生い立ち、青年期の不遇な官途、中年期の家族、友人との死別という諸要因を分析することを通じて、彼の「人生当適性為楽 (人生は当に性に適ふを楽しみと為すべし)」という価値観が如何に形成されていったかということを追求した。その人生観は彼が晩年に文学作品を作ることを自ら放棄した理由の一つである。また、江淹の文学作品の分析を通じて、彼の文学的主張と作品の風格における、「永明体」の代表的詩人である沈約との差異を明確化した。それは彼が永明体詩人達の不興を買い、文才が尽きたと嘲られる所以である。そして、歴史資料を入念に調べ、当時の江淹が身を置く政治的環境、つまり、斉武帝の人材政策及び寒人政治、「竟陵八友」の政治的野望を明らかにした。江淹は自分の政治的才能を発揮し、武帝に無能な文士と見なされたくないため、永明年間、彼は武帝に軽視された沈約、王融らのように経国に無用な文学理論に没頭することをせず、政治の実務用文書を多く作り、個人

の感情を表す文学創作をほとんど行わなかった。これが、彼は文才が尽きたと言われたもう一つの原因である。

つまり、筆者は江淹の「人生当適性為楽 (人生は当に性に適ふを楽しみと為すべし)」という価値観、斉武帝の寒人政策、江淹が「永明体」詩人に諷刺された真因、の三つの視点から「江郎才尽」という問題の原因を深く追究し、新たな江淹像を再構築した。

第三章は蕭子良の劇的な失脚、王融が起こしたクーデターの本質を明確にした。王融は南斉の著名な文学者、政治家、六朝時代を代表する王氏・謝氏（陳郡陽夏謝氏）という二大名門のうちの琅邪王氏の出身である。優れた文才を持ち、竟陵王蕭子良に寵愛された「竟陵八友」の一人でもある。しかも、唐代近体詩の先河を開き、詩の形式、韻律の美を追求する「永明体」の隆盛に伴い、彼は「永明体詩人」の旗手となり、沈約・謝朓とともに永明体詩体を創設した中心人物と見なされていた。しかし、歴史評論の中での王融はあまりにも功名欲の塊と図式化され、彼の真の人物像が見えにくくなったのである。また、南斉竟陵王蕭子良は南斉第一の文学者である。沈約、王融など当時超一流の文人や、僧裕などの高僧を自分の文学サロンに招き、文士達に天下の文章を抄録させ、名僧らに仏法を講論させ、『経唄新声』を撰述させた。南朝文化のさらなる繁栄に絶大な貢献をした。幼少の頃にすでに、蕭子良は親の別居を止めたことをきっかけで父武帝の寵を勝ち得ていた。以来彼は侍中、司徒などの要職を歴任し、順風満帆な政治人生を送ってきたが、永明十一年（493）正月、文惠太子蕭長懋が急死した時、日ごろから武帝の絶大なる親愛を受ける蕭子良は後継者になる可能性は極めて高いとされたが、予想に反して、躊躇した武帝蕭賾は三ヶ月後に蕭子良を選ばず、皇太孫蕭昭業を後継者にした。そして、王融のクーデターの失敗のため、鬱林王蕭昭業の恨みを買い、憂憤のあまり、三十五歳の若さで病死した。武帝の寵を受け、斉の政界で重職についたにも関わらず、蕭昭業との後継をめぐる争いに破れ、王融とともに起こしたクーデター（蕭子良は王融を帳内軍主に任命し、クーデターの領袖にした）の失敗の後、あまりにも早く劇的な失脚を遂げた。管見の限り、蕭子良の謎の失脚、後継者争いにおける敗北の真因についての研究は未だにないため、真の蕭子良という人物像がまだ描かれていない。

真の王融像と蕭子良像を構築するために、王融、蕭子良が起こしたクーデターの真因を探らなければならない。筆者は竟陵王蕭子良の政治的野心と彼の人材政策、武帝の寒人人材・戸籍・財政政策及びその実行動機、王融伝に見える「晩節大習騎馬」の政治的意味の四点の検討を行い、前述した政治クーデターの中高級士族と斉武帝が代表する皇権政治との対峙という本質を明らかにした。武帝が推進している寒人起用政策と相反する中高級士族を中心とする政治を行うことは竟陵王蕭子良の後継者をめぐる争いにおける敗北の原因である。

王融が功名心に走り、高い官位を求め、政治の実権を渇望したのは武帝が推進した寒人政治に抑圧された琅邪王氏をはじめとする北方豪族を再興するためであった。王融、竟陵王蕭子良それぞれが抱える政治的焦燥感を浮き彫りにし、二人の真の姿を描いた。

4. 今後の課題

第二章では、斉武帝の寒人政策について論じたが、南朝歴史上、寒人政策を採用したのは斉武帝だけではなかった。宋武帝や宋明帝も同じく寒人を腹心として抜擢した。そこで、斉武帝の寒人政策独自の特徴をさらに究明しなければならない。また、当時竟陵王蕭子良と同じく、高帝第二子豫章文獻王蕭嶷も、民生休養を唱えている。彼の周辺にも文士が集まり、一つの文学集団が形成されている。蕭子良・蕭嶷をめぐる二つの文学集団、それぞれの特質に迫らなければならない。以上の疑問点を今後の課題として研究を進めたい。

参考文献

[1] 稀代麻也子『宋書のなかの沈約―生きるということ―』汲古書院 2004 年
[2] 鈴木修次『漢魏詩の研究』大修館書店　1967 年
[3] 川合康三『中國のアルバ―系譜の詩學』汲古書院 2003 年
[4] 川合康三『桃源郷　中国の楽園思想』講談社 2013 年
[5] 松本幸男『魏晋詩壇の研究』朋友書店　1995 年
[6] 興膳宏『六朝詩人伝』大修館書店 2000 年
[7] 川合康三、興膳宏『隋書経籍志詳攷』汲古書院 1995 年
[8] 稀代麻也子「江淹「雑体詩」の曹丕」『文芸言語研究文芸篇』第 56 号 84-66 頁 2009 年

[9] 福井佳夫「曹丕の『与呉質書』について――六朝文学との関連――」『中国中世文学研究』第 20 号 1991 年 1-25 頁
[10] 成瀬哲生「曹丕のことども：髑髏と感傷」『北海道大学文学部紀要』第 32 号 1983 年 191 頁
[11] 黒田真美子「江淹の悼亡詩について」『日本文学誌要』 第 58 号　1998 年　3-16 頁
[12] 黒田真美子「江淹詩の叙景表現について：その色彩を中心として」『お茶の水女子大学中国文学会報』第 20 号　2001 年　1-30 頁
[13] 松浦史子「江淹『遂古篇』について―郭璞『山海経』注との関わりを中心に―」『東洋文化研究所紀要』第 151 号　97-147 頁　2007 年
[14] 松浦史子「江淹『瑤草考』―郭璞『瑤草』の継承と展開―」『東洋文化研究所紀要』第 155 号 93-132 頁 2009 年
[15] 吉川忠夫「沈約の傳記とその生活」『東海大学文学部紀要』第 11 号　1968 年 30-45 頁
[16] 越智重明「宋斉时代の卹」、『東洋史研究』 22 巻 1 号　1963 年　39-54 頁
[17] 川合安「唐嵩之の乱と士大夫」『東洋史研究』54 巻 3 号 1995 年 443-471 頁
[18] 藤井守「六朝文人伝―王融 (南斉書)―」『中国中世文学研究』第 14 号 1979 年 42-56 頁
[19] 藤井守「六朝文人伝―『南斉書』王倹伝―」『中国中世文学研究』第 17 号 1984 年 42-48 頁
[20] 中嶋隆蔵「蕭子良の精神生活」『日本中国学会報』第 30 集　1978 年　72-86 頁